HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	グローバル・シティ上海への中国朝鮮族の移動に関する研究 ： 「移動のなかに住まう」を実践する人々の場所からの考察［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	権, 艶美
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14413号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81767
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	QUAN_Yanmei_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：権　艶美

学位論文題名

グローバル・シティ上海への中国朝鮮族の移動に関する研究
―「移動のなかに住まう」を実践する人々の場所からの考察―

本論文は、朝鮮半島をルーツとし、現在は中華人民共和国の少数民族の一つと認定されている、中国朝鮮族（以下朝鮮族）の移動を対象とした研究である。中国東北地方の延辺朝鮮族自治州に集中していた朝鮮族人口は、1992 年に中国と韓国の間に国交が樹立すると、韓国への出稼ぎなどの理由で国内外へ拡散していった。先行研究では、中国の少数民族としての朝鮮族が存続し得るのかを関心とする「発展論」と「危機論」と分類される一群がある一方、中国国内各地へ移動したケース、韓国や日本などに移動したケースを、それぞれ国内移住、海外移住という枠で考察するのが通例となってきた。本研究は、こうした従来の枠組みに批判的検討を加え、朝鮮族の移住という現象を新たな枠組みから捉え直そうとする試みである。

本研究の目的はまず、「グローバル・シティ」としての上海がディアスポラ集団である朝鮮族を引きつけるメカニズムを明らかにすることである。グローバル・シティ上海は単独の都市空間ではなく、東アジアという地政学的な条件、また中国の多民族国家としての面および社会主義体制の国という面が絡まり合う場所であり、越境的移動性の結節点である。上海の朝鮮族は越境的移動性を体現する主体であり、これまでの移民・移動論ではほとんど議論されなかった「移動するディアスポラ集団」という新しい視点を提供する。

朝鮮族の移動をめぐる先行研究では、中国国内の辺境から都市部への移動による伝統的なコミュニティの再編か、あるいはコリアン・ディアスポラにおける新しい生活の開拓という、いずれも朝鮮族を国家や民族から派生した存在とした上での移動の経験が語られてきた。こうした従来の研究は、朝鮮族の歴史性及び移動の連続性に重点を置かず、その「移動のなかに住まう」存在としての面を十分に捉えていない。

こうした「移動のなかに住まう」中国朝鮮族のうち、上海へ移動した人々のひとつの特徴が、高学歴者が多いことであろう。ここで言う「高学歴者」とは、大学学部卒業以上の学歴を持つ人を指す。本研究では、その特徴に焦点を当てて上海朝鮮族のエスニック・コミュニティの構築を分析・考察することで朝鮮族の移動を再検討し、朝鮮族が容易に移動

する理由を探求した。また、朝鮮族を「移動のなかに住まう」を実践する人々と見なし、彼らのグローバル・シティ上海への移動の動機付けや過程、上海でのコミュニティ形成の過程について分析し、朝鮮族にとって移動が持つ意味を明らかにする。それらの問題群を通して、国民国家という枠組みが揺らいでいる「移民の時代」に、ナショナル枠の中での移民研究の視点では議論されてこなかった移動のありかたを再検討することを目的の一端とする。

本論文の構成と研究方法は次の通りである。

上海での調査は、2013 年から 2019 年にかけて 6 回現地を訪れて行い、1 回は電話による調査を行った。対象は朝鮮族 73 人と韓国人 2 人である。調査にあたっては、対象者とのネットワーク作りを重視し、信頼関係を築いた上でインタビュー調査を行った。また、調査対象者にインタビュー調査の意図について十分に説明し、IC レコーダーで録音する許可を得て調査を行った。

2 部構成のうち、第 1 部は第 1 章と第 2 章から構成し、調査対象者に半構造化インタビューを行った結果を中心とした。

第 2 部は第 3 章と第 4 章から構成し、第 3 章では 4 つの朝鮮族協会、第 4 章では華東朝鮮族週末学校に参与観察を行った結果を分析した。

以下は各章の要約である。

第 1 章では、グローバル・シティとしての上海が朝鮮族を引きつけたり押し出したりするメカニズムを明らかにしようとした。その結果、上海へ移動した朝鮮族は、国内か海外かの区別によって移動先を選ぶのではなく、社会的地位の上昇と自己実現のために戦略的に上海を選んでいることが明らかとなった。また、上海は朝鮮族がディアスポラを経験したマイノリティとしての自覚を持ち、文化資本を戦略的に活用して社会的な地位の上昇を期待できる場所であることが明らかとなった。

第 2 章では、上海の龍柏コリアンタウンを焦点とし、朝鮮族の更なる移動で形成されたエスニック空間の中で、朝鮮族社会と韓国人社会が共存関係を築いてきたことが分かった。また、朝鮮族の移動は言語・文化資本及びコリアンネットワークを利用した移動であり、韓国への依存度が強い。これは、他の少数民族に比べて朝鮮族が移動先でコミュニティを再建できる重要な一因であった。

第 3 章では、中国朝鮮族科学技術工作者協会（上海）、中国朝鮮族医師連盟、上海朝鮮族女性協会、世界韓人貿易協会上海支部の調査を通して、上海での朝鮮族コミュニティの

形成を把握しようと試みた。その結果、これらの協会は上海ホスト社会への貢献を通して、朝鮮族の上海主流社会への編入を目指していることが明らかになった。マジョリティの高学歴者が社会階層を上昇するのとは違い、朝鮮族は、「故国」の韓国との接触及び様々な移動の経験の中で、中国人というアイデンティティを確立し、定住国で主流社会へ編入されることを望んでいることが示された。

第 4 章では、華東朝鮮族週末学校で文化継承の一環として行われる言語教育に着目し、朝鮮族のコミュニティと次世代への文化継承の様態を考察した。朝鮮族は現代の情勢に合わせ、次世代に継承する言語を延辺朝鮮族自治州で用いられていた朝鮮語から韓国語へと転換している。この観察を通し、韓国語教育が朝鮮族の文化的アイデンティティを養成するために戦略的に行われていることを指摘した。

終章では、第 1 章から第 4 章までで得られた知見をまとめて、本論文の総括とした。

第一に、朝鮮族の上海への移動は、国内移動と海外移動という枠を越えた形をとっていることが実例から明らかになった。朝鮮族の上海への移動を通して、グローバル・シティというホスト社会・韓国・日本との関係が複雑に絡み合う環境の中で、ディアポラとしての朝鮮族の移動が動機づけられ、継続していることが示された。

第二に、朝鮮族の上海への移動は、単なる個人的な移動ではなく、安全性が高いエスニック・コミュニティのネットワークの中での移動であることが明らかになった。従来の研究では、移民・移動を個人的な行為として捉えていたが、本論文では朝鮮族の上海への移動はエスニック・コミュニティ自体の移動でもあることを示し、従来の研究の限界性を指摘した。

第三に、グローバル・シティである上海では、朝鮮族社会と韓国人社会が共存関係をなしたエスニック空間を形成していることが明らかになった。従来の研究では朝鮮族を中国の少数民族の一つとみなし、国内の移動先でコミュニティがどのように再建されているのかが検討対象となってきたが、実は朝鮮族がディアスポラ集団であるからこそ、コミュニティの再建が可能であったことを指摘した。

以上のように、本論文では、グローバル・シティという場の概念とディアスポラ集団としての朝鮮族、さらに「移動のなかに住まう」という視点を用いて朝鮮族の移動を考察することにより、既存の移住移民論での国内移動と海外移動、朝鮮族の移動研究の中での発展論と危機論の二項対立を乗り越える新たな視点を提示した。